開卷驚奇俠客傳　第五集

全部六冊之五

へ12
3157
F25

帝銀
金羅漢
金長

開卷驚奇俠客傳第五集巻之五

浪華　蔬園主人編次

第四十九回

鬼瘤越ゑ豪俠妖物を斬る
楳原宅ゑ莊官勇士を誘ふ

前話休題却説。達小六助則ハ。志摩國鳥羽の港ゑく。老樹信夫庚吉們ゑ
另ゑそよう。太神宮へ參詣ゝて。五柳村へ回去き。稲城守延ゞ墓碑を建。追薦
の法莚を開きて。村客們を饗應ゝ果つ。遺る處もあつりしゞ。今ハそ暇を告
て。五柳村を立出つ。先攝河泉三州より。紀伊國ゑ至ア。熊野の奥を一見ゝそ。
开後ゑ四國鎮西まゞを編歷せんと慮ひゝゞ。今番ハ伊賀越を河内へ出んと。
志ゝ立出るゑ。其朝ハ村客們ゞ送来て。離別を惜ミゝつゝ。开頭の口誼ゑ
時尅轉ア。午下る比五柳を出ゝゞ。春の日ゑゞ程ゑく暮て。垣内の坂ゑ

特
3157
25

う[illegible]掛る頃へ既に快晴昏に近くなれども今日這山を越んとへ豫て慮ひ〜待るに四月初旬の名月を便に山徑に入る程に怎に〜てへ踊錯へ〜ん鬼瘤越の山路に横さに迷ひ去ぬる。抑這鬼瘤越とへへ伊勢國一志郡榊原の一坂より伊賀國山田郡坂下村へ出る路なり。程へ三里に足らざれども。極めて嶮岨にして九折なり。山中に支徑多く。惑ひ易き所なれば小六へ什麼の心もなく。脚に任せて分入るに月を遮る樹下闇なり。樵夫の通ふ徑路より。山復山に迷ひ〜へ去れども〜人家へなく。月も殆雲隱れて。没方の空にあり〜るに。徑の末へ漸々絶て。巖石峨々と峙ちて。崖の上へぞ出でぬる。原来道路踊錯へて〜り。怎ら〜知べ山口まで。委く訪て來べりなれど。脫落にして悔やども。今更に立回るべきも。人家まで出るも容易なれば。除非今夜へ這首に明して翌朝徑を見めべ。人跡絶て処にもめぐり。推て夫們に遇ぬべきまで。然而こと去向を問べきこと既くも思量に決め。傍邊の樹陰に柴折敷て。行裏を解下し。茂る新葉の露打拂ひて。脛太くも睡んとすれに。肛裏最空てあれども。畫食の割竜に抗重なれど。寄出して吃やつ。熟四下の景迹を看るに。絶壁の下方より。谷水あると思しして。漲る水聲滔々と響き。松の嵐に咽び會へり。四方へ金青山にして怎地を弁處なし。省分ぬに。春の餘波の微霞。霑き立て朦々たるに。月はなく〜暗くなりて。只杜鵑の朋喚ぶ聲のみ。那邊這邊に所听へり。歸るに如ぐと啼とのみ。事を想へば是も亦慰め難て離別に〜。信夫老樹庚吉們ざへ人へ浸に慕ぐ。悵然として。イさるぐ水を飲んと溪に下る。徑を見めて不覚に一町ばかり立回りて。小篠が本を掻分て。下んとせ〜に怪〜しべ。谷の底に物音して。人の私語ぐ聲。仿像し。怎に夜更へる山中に人在るべくへ所思ねど。山豪なりの迹を跟て窺へ。辛もあらん欤と想へべ此一とも由断せじ。茂林の間に躬を潜めて。徐くに近著

寄と。尚光景を看究んとて。脚を駐めて覗ふ間に。稍山端に没んとする。月の前に
る叢雲の。僅に霽て斜に射る。光輝に開方を仡と瞻遣るに。這谷水に市丈
餘にて。奇巖峙ち老樹覆へる。前向の岸に平面なる。大石あるを上に。年紀拙弱き
一個の婦女と。脛も顕露に押伏居て。什麼とも得知ぬ妖物の。丈五六尺もあるいと
看るが。匈匈繫とて犯さんとす。小六は最も不審とて。心を静めて尚克看るに。婦
女は酷く魅せられたるも。なほ怕る色もなく。件の妖怪が頭を抱きて。身を委ねて
る景迹なれど。黒髪長く蓬と懸て。正可にも解ざるまでに。倘は這怪
物の雌にあらずと。我れを看るとも。著る衣裳の色までも。人に紛ひ無きまでに義
侠の心怒頭を衝て。這畜生奴が不敵なる。萬物の霊たる人を魅して。恣恣に
挙動る事。憎とても尚飽足ぬと。咄嗟剛才這奴を撃殺して。這婦女を救ん。
竟は命を喪ふべしと。念へば快く谷水の。邊に徐々下立て。渡去んとしれ

ども。水邊は倍暗くて。水聲高く激ればれば。底の深さを測量られて聊
躊躇くして。忽ち音を意者て。刀に着る小刀を。抽出して銑剣に狙
撃んと。近著寄て。間程なき椎樹の。一幹立るを小盾に把て。那妖物を覗看る
に。快楽に餘念なきまでに。小六が寄るを知ざるに。漸に所識なく。頭を抬
げて訝しげに。眷顧る處を看得て。丁と打出せる刀子の。的は些少外れど。
咽吭の左に。盡処に柄口迄て。撃捫る。不意を撃れて。奇異氣に。一聲叫
びて倒れんとせしが。窮所と外れたれば。岸然と起て。婦人を打乗て。立る小
刀子搔拐乗て。小六を認て。飛鳥の像く。那谷深を跳て。喻て。椎樹を阻ぐ
らに。抓み着んとして。小六は騒がず身を反して。快くも刀を曳抽て。透さず斬
るを。那奴も亦眼疾く左へ引外して。躍て蒐るを。搔潜て。沉んで撃る
二の太刀に。腿の上より鋒外れに。斬下られて妖物は。恐ろしや慮なく一聲

高く吼猛て。那溪水を飛踰て。往方も知ぜ逃亡くり。小六ハ犹も撃止んと
て。跟を追んとしくるれども。那溪水の激浪ふ。阻らまて撃漏し。歯噛を做て
立くるしぶ。恁も飛捷の物とし知ハ。沮伏て刺べくしと。脱落ふくりと悔めども。
今ハ及び難くるまバ刀を拭ひて刀室ふ収め。傍の水邊ふ投出くる。楡の樹枝を拽
寄携ひて。身を軽やふ反攫くりくれば。難ゆく前向の岸ふ渡ゆつ。且快件の
巌ふ上りく。那婦女を看てあるバ。酷く魅せらまくりとおぶしく。听ふ得堪ね
詹語を吐つ。現心もなき容体なるまで。看くるふ忍びぜ。腰ふ着くる楽籠より
薬を投出て。谷水を掬び上口ふ含めて勦るふ。要時あって。漸ふ。俺ふ帰ゆしゆ
あくん。起上ゆく四下を見廻し。只呆まくる情景なれば。小六ハ詞を和らげて。
やよ婦人心下ハ慥ふ做たる欤。抑和女郎ハ何處の人ぞ。這處ハ伊賀越の山中
ふて。人跡希なる處なるふ。和女ぶ妖物ふ魅せらまて。危殆き景迹を看くるふ

忍びぜ。开妖物を撃んとくるふ。那奴ハ痛痍を負ぶし疾く走りく逃亡
くりとひくまて婦女ハ浅猿く又怖しく羞しきゆ。袂を顔面ふ推覆て。只潸然と
泣のくるまバ。小六ハ然こそと慰めて。現悲哀きハ理なれど既ふ命ハ救ひられぶ家ふ
回くも難くハ非ぜ。心を静めて仔細を話説ふ。身中ふ怪我ハなくし。俺ハ伊勢より伊
賀へ越る。旅人なぶ。路ふ迷ひく。料らぜ這頭へ来まくるふ。往べき径の絶えれば。今夜を
這首ふ暁えと思ひ決めくりくまれども。和女郎ぶ家の遠くるぞハ。剛才より送り
得ません。甚麽ぞやと問くるふ。婦人ハ辛うじて泣水を押へ。怎地の御方ぶ知ぜ伝を
ど。さう厄難を不料も救ひあるハ御鴻恩ハ。生々世々忘却伝ぜ。奴家ハ伊勢の樣
ふる荘官與六作ぶ侍妾ぞ。名まバ小鶏と喚まくるふ。這黒昏ふ主人の外孫の奴
家ぶ子房ふ来るひく。這方へ来まくと。ひくまくと甚麽意ゆく。隨ぞ。出ると念
ひくし。尓来ハ。俺ゆもあくぞ家宅を出。开處とも知ぬ山中ふ。侶まて去と所思くより

小六

逐逐小六救小鶏

へ夢幻とも解ぜず。唯絶息をなげうち。毫末の緯も知らざ然而妖物とのこと
まこと。什麼なる物でいかゝ。とゝへハ小六ハ點頭て。原来那畜生奴ハ和女が主公
の外孫と化て。哄誘し出て念慮の侭に。慾を遂んとせしわざあらん。恁没
候の月夜おく。形體ハ決て看留ゆゑ。頭ハ髪を亂せる像く。最長き毛の
生累て。眼の光妻〳〵。吼る聲ハ山彦ハ響きていとも太やうなり。最初柄刀
の銑剣を。咽喉の傍ハ擊稠うしを衝立て搖抛棄。跳て蒐る身體の輕
やうさハ。年經る猴ハ彷彿う。猴千歳を歴る時ハ業通を得て人語を解
し。克身體を化して。人と変ず。人家ハ入て東西を偷て。且又开性多婬ゆゑ美婦
人を看て拐し犯して後ハ殺して喫ふ。是を彿々と名着る由唐山の書ハ看とる
るなり。亦本朝ハもそる癖あり。美作國中山の神ハ猴磨ゆゑ。毎年少女の
生贄を供ぜしめしを。東人の武勇ある者。欺き捕へて。其暴戾を治めしるゆ

載て中古の譚籍ハ見ゆ。案ハ件の妖怪ハその猴磨の彿々ハ類狡。這頭
ハ傳へし話談ハ聞き欲。といふハ婦人ハ殷ハ懼ゆゑ身毛も弥立ぐらゝゆゑ戦慄
きこゝるハ。徐ろに對へそのハゝ。任ゆゑ宜へべきるゆと。夜話の序ハ听しるゆ。
這伊賀伊勢の境ハ山ハ東西ハ長ぐらゝれど。南方ハ幽邃くして。吉野の
奥ハ。墓ハ原巴ハ湖より紀伊國の。熊野迄も接きられば。九十里とハ際限
を識ぜ。されば異形の獣物も。種々来て住む中ハ最老太ゆる猴有て。
とう這頭へ来渡りて。村里ハ入来て東西を喻へ。婦幼を扛攫ひて。携去と
いふ噂ハ伝ゑど。看認し的ハ伝ゑぞ。さらぞ。されども數年の間ハ三人五人去ら
と知ぜ。成ゆ人ハ必ゆる故國司ハ嚴〳〵令せて。獵人どもハ賞銭を募
ゆ。普く狩せる人ども。影ぞハ看ぜと禀をゆゑを。却也柴樵る山人どもハ。不
意て那老猴猴と看る者も甲乙あれど。男子ハ曽て仇を做ぜと禀

つゑより

傳る由なれど。奴家ハ近屬楳原へ来ア〻者ゆゑ。委きまハ知ぬけれ。さて件の妖怪ハ必ず猩猴ふ疑ひ。今こそ君ぶん武勇ふ逃走りて。ちるとも。開首屬們を率連て再び来るハ甚麽せん。噫怕〻と聶けば。小六ハ听て打笑ひ。開邊ハ心安れ。假令那奴ガ従類を。几個率連て来るとも。俺ふも亦手段あるハ。酷く怖畏るゆ勿ゑ。原来その云傳へ。老猩猴奴ゆゑんを。撃殺て里人の後の患を除ぎ。いと不便なるゆども。それども脚ふ疾を負ぜられば。再遍那奴ハ来るまで。とのひつ腰の燧石を拿出て。用意の火縄ふ火を移〻。四下の枯柴拾集めて。松明四五把造を出〻。火を吹付て嚮ふ投る。小刀を索るふ。那妖怪ガ抽棄る時。旁の松樹ふ立つ巳を抽取て血を洗ひ。袖ふ拭ひて刀室ふ着け。這渓水を熟視るふ。水ハ却也浅〻て。二尺ふ過ぐと見ゆるふぞ。小六ハ四下の太石を輕やるふ曳穿ちて。二個三個並べるまハ。俄然ふ石走出来ゆて。渡るふ累ひ。又

前向へ超去て。那椎樹の下を着るふ。斫る時の獣ガ血ふ草を染ふ。朱ふ染てゆると。花火を爆て看てゆまハ。那妖物の指ゆあらん。薄黒き毛の生るふ。白銀の像き尖爪あるを。二本まで斬落て。有るまハ取上て。枕熟視るふ。毛の強きこと。鍼の像く。爪の利きこと。刀鋒ふ似て。寔ふ希代の異物なれば。乗て措んも有繋ふて。谷水ふ血を流〻。懐帝を拿出て。弥重ふ包て。腰ふ着るまハ。件の婦人も渡来て。怕る〻差覗きて。舌を振ひ。俯伏くを。小六ハ。ちら看顧て。空うち仰ぎて。いくやらハ。恁夕月ハ没果て。闇き山徑を遥ゆ。楳原まで出んゆハ。最も難義の事なれど。未年若き和女郎と。二個這山中ふ暁て。心ふ愧る所あり。されば剛才よろ打点て。宿所ふ送り届くべ〻。さて。疲れうるゆめど。這理を听解て。俺ふ跟ひ来るべ〻ことを。嚮ふ憩ひ〻所ふ去て。行裏を扱拾め。松明振て前面ふ立ハ。婦人ハ。ぞ背くべき。只唯々と應答て。跡ふ跟ひ。々去るハすれど。疲果て。樹根巖根を踰難るを。勦て慰め扶け曳て。原来〻路へ立戻

中ふ小六ハ遠慮を廻らして懐紙を引裂つ。這首那首の樹枝ふ結着て栞と〜つ。後ふ人の猜忌ん折の照鑒の為ふと残〜しる。火速の准備感ぜべ〜。偖箇這丈径を峯ふ上て谷ふ下て。約莫二里許も来つらんと思ふる比去向の方ふ火の光隱々と所省初て漸人の近着く聲。尚ふ所听ふるるべ。小六ハ耳を敬て近寄るまふ〜熟と听べ。這婦人と索るあるべ。數人の聲として小鴉よ喃〜ぞ叫ふるるべ。振顧て女ふ向ひ。那前面ふる人聲ハ正可ふ和女郎を捜索る人〜。近着ふ間ハ有まじ〜るるべ。俺ハ這首より袂を分ちて。伊賀路を投て踰去べ〜。俺今件の衆人ふ會て。慥ふ和女を遮与ふ比べるれど。那這等〜き男女二個ぞ。夜の山路を伴ひ来るべ。後ふ倘人猜ひ。和女が與ふも妙あるべ。俺も亦影護きるの為ふも非るべ。故意這首より另ふ〜ぞと。道乗て去んとすると。婦人ハ慌忙〜く拽扯めて。のこまム所理るれど。奴家ハ已ふ妖怪ふ哄誘〜出されて命活くもあるべ〜を。君の御武勇ふ幇助ふ依て再び家ふ還る事恩ハ譬ふる物もなきを。僅ふ一片の報酬も做で另ふるるべ。獸ふ等〜き者ふるるべ。屈て桜原まで来るべ〜。最羞愧〜きるの為ふ。奴家ハ主翁ハ六十ふ餘て愚ふ直る人なるべ。猜ひ来るるハあるべ。倘恩人を侶んべ。倒酷く叱らるて猜忌を受る綽もあるべ。必一遍来るべと又餘義もあく道るれど。小六ハ一切肯ひ。響ふ和女郎を救ひ〜。酬を受ん與ふハあるべ。只妖物ふ人の命を殺ん為を看ふ忍びを一臂の力を盡さくの為ふ信て和女郎ハ婦女の身ふて。夜の山路ふ得堪ざれば。一坂まで送て去て立還んと慮ひ〜く恩を係べきるのあるべ。愛もあくの比切で。袂を拂ひく去んとすると。婦人ハ枕も推扯めて。さまでふ宜ふるのあるべ。又為方も估らねど。君の本國ふ姓名を悍あざ〜名告せあへ。主公ふ報て一言の恩謝を他日亨まんと。いふ小六ハ冷笑ひ。俺ハ東の浪人ふて。諸國を経歴て。文武の執行を主とする。一處不住の者なれば。今ハ家もなく國もなく。謝禮を受んるるどハ。一切思ひも係ざれば。名告ん亦益

ゐき緯ゝ只管放ち遷さべ。とのゝども更ふ會得えぬ。云云ふ爭ひて。言果べくも
あゝる内よ追捕の人い近着て。火光を看て走り来ぬ。小六も今い為方ゐく。
さゝば這衆人ふ。婦人を遮与して辞ゝ去んとて。こゝや喃々と呼立ぬ。莊官ゞ近
隣の者們ゐるゞし。山獵打扮の莊客們。一隊約莫十名許。手ふ松明を把るあり。
竹槍を提斧を擔げ。鉄炮を持るもあり。各腰ふ一口の。山刀を横ゝて。麻苧の編る
山岡頭巾を。被るも那這所看るゞ。迭よ甚麽やる耳語て。左右ゐくい寄も
来ぬを。小六い找ゝて婦人を指示ゝ。汝們い這婦人を索めゐ人ゝい非ずやとのゝ
ゞも回合い措きて。後邉の婦人を認めつ。小鴉女郎い這首ふ在り。原来い這
奴ゞ偷ゝ出ゝて。娼妓ふ售んとせゝゐゞし。逃ゝかせをと動響つ。快失々と捕綢
ゝて。打も蒐らん光景ゐをど。臆氣者ゑぬ武士の。賈の刀ふ躊躇ひて。只罵々と
罵るのゝ。有繋ふ找ゝ難ゐると。小六者听て礮と疾視へ推叅ゐる莊客們。先礼を

做ゞ後悔あゝ人。先静ゞそふ情由を听け。俺い路行逆族人ゐつゞ。是ゐる婦人が
狒々とのゝ獣ふ扛攫ゝて。既ふ命を隕さんとせゝを。俺その獣を逐走らせて。這首を送
ゞ来ゝるゝとゝゞ小鴉も聲を係け。人々疎忽のゆゐをを。這人位い宜ふ如く。奴家
ゞ命の親ゐるを。急惚て失差ゝゐふゐ。とのゝども蠢愚の莊客們。爭でゐ信容べき。
原来小鴉も心を合せて。這奴と侶ふ走んとせゝふ。途ふ迷ひく這頭ふ伶仃ひ。咱們ふ捜
ゝ出されて。為術ゐく出て来ゝるゐゝ。童兒ゞ昔々話ゐを。狒々の妖怪の綜も听け。ゐ更
ふゐる虚言を。听べき耳い持ぞゝ。四も五もの。ゝゞ。开奴を溥ゝて。小鴉を畧い返さゞをと一
個ゞのゝゞ。共侶ふ。多勢を特ひ贋猛者能ゞ。貪充とのゝゐゝ疾く。左右等ゝ棒振上て。撃
んと競ゐを。小六い驟ゞゞ。差違ゝて打落せゞ。透さゞ突出と。竹鎗を。身を冬て。手下ふ跟
入を。开奴ゞ項髪引曳ゝて。根條の上ふ投着ゐを。抗懲ぞゐふ。斧山刀。手ふ〳〵。兵器を打
振つ。齊一撃んと立蒐ゝど。小六い刀ふ手も掛ぞ。めゝゝゝとのゝ。俄ふ搔潜ゝて。い打落

引被ぎて投退け。或は蹋仆し操居るべ。一個も残らず打仆さるて。敵〻ぐ〻や思ふん。その鉄炮は甚麽の與ぞ。快疾搏て救ぐやと。いそまして猛可ふ心着く。件の男は鉄炮の火蓋を切て押向るを。小六は着るゝ鷙鳥の像く。走蒐て一個を捉へ。小楯ふ拿れば狼唖て。躊躇ふ所を得るやうと。捉へ〻男を曳被ぎて。力ふ任せて投棄ぐれば。鉄炮狙る筒口ふ。磴と礙て。二個齊に。轉ぶ激勢ふ火蓋は落て。投着らるゝ漢子ぐ肩を。撻と打抜き。旁ふ立る一個ぐ。小鬢をかすりて。丸は遥ふ飛散るべ。生死は知ざ。這那侶ふ。一聲叫びて仆るゝ。これあぞ。駿く。莊客們。勢折け。肝を消して。やよお待。助けよ。鹿忽は俺們ぐ誤失ふ。免させあへと。異口同音ふ。哀〻乞て止ざれば。小六は奴へ。る聲振絞て。玉石と分ぬ愚人ふ向ひ〻。問答せんは無益ふ。麈ふもべき奴們ぁるとど。已ふ疎忽の罪を知べ。姑且命を預け措くべ。叮嚀ふ陪語禀して。這婦人をその主人ふ。慥ふ送り届くべ。聊もそも疎畧ぁるべ。俺其時は決して免さず。心得る欲と

窘めて。怖畏を做て戰き居る。小鶏とやとゝ眷顧て。怒ふ和女ぐ留め〻故ふ要時ぁるとる這奴們ふ。疑ふ〻は遺憾ふ。俺は這首より去て。和女郎を送り行べるとのふ小鶏も為術なく。僅ふ開意ふ任せて。枕も尽せぬ恩謝を。演るふ果ぞぁるゝる。當下小六は鉄炮ふ中て仆れ〻二個の漢子を。曳起させて熟視るふ。一個は最も浅疾なれば。已ふ快。俺と起て。手巾を鉢巻して。今一個は肩を。疵を。搏捻れて。問絶して。引立て。疵を捲せ。藁を與へ。开名を呼せるべ。傍を至るべは所見ぐ。莊客們ふ向ひて。已們は怒ふ猜忌を生して。俺を殺んと〻るとして。止むを得ず投懲るふ。飛道具を携有るべは。自業自得の疾を負うべ。這奴が死ずとも。嗷論は免ぐ。論ずべき弾はあるべ。後ふ至りて。些ふも世人は疑ひて。俺武士道の瑕とるべ。久後

仔細あるまじとの。証書を記て得させよ。さらずば決して免し難しと理を詰てのひ
くるべし。莊客們は面を照着せ舟に乗りて答るあり。仰の趣理ふ承はれども。違背
もべくはいなど。俺は農業と。山獵をのゝ綜とする。水飲莊客でいへば。甚麽ある
事を記くものやらん知る的はいなれ。浪速津をゞふ果處そ〳〵。怒ひし者は
這中ふへ。一個も居ずといへば。這義ぞうはえさせあへと。語詞一舟の處寔ふ餘美
あく及へくるべ。小六は要時沉吟して。甚麽せましと思ふ所よ。思繫あれ樹陰より。
その契文は在下が。調へて参らせんと。聲を係つ立出る者あり。大家駿きてこれを
看るべ。是既ち另人あらぞ。楳原の莊官與六作へ。登時與六作は恭しく。小六ふ
對して一揖をほ在下はその婦女ぶ主あり。楳原の莊官ふ。破垣與六作と喚る者
ふてひこの黄昏ふ开女ぶ。出て回ぞといふよりて。近隣の者を集め。部を分て
四方の途へ索ふとそ差しるべど。犹も心の安堵ぐこくして。在下も亦一両個の。

農夫們を跟隨て那首這首とあく索ふ。一坂のあるを。婦人は怪しき
人ふ拽ぎて。這山やらも入るを。看るあるどいふ者ひるべ。覚束あくは思へども。
還やもやらぞ。這山路ふ攀登るに。漬松漸々尽果て。代を負めん由あるし折。
嚮ふ出し〳〵這的們ぶ。火の光輝を認得るふ迹を慕ひて来て着るべ。思ひも
依ぬ這場の騒動。婦人は既ふ恙もあくて。救ひをし因忍人は。猜忌を蒙りあひ。
酷く死礼及びを。武藝ふ長せるひしふ幸ふして過失あく。免さを難き里人
們ぶ。罪科を恩赦あるの。一五一十は那樹陰ふて。快承へども。出後きてはあるす
ぶ。出ん期あくて躊躇いつ。徒ふイそと。今這哭書と記べき的のあるといふて罷
出るる。現も這頭ふ在る者どもは。一文不通の徒ぶ。哭書は在下代筆して。爪押を
取てもらんいそしくと云あるる。懐帋を拿出て。腰の矢立ふ筆抽出し。走筆ふ書竟を。
莊客們を眷顧て。酷くその死礼を窘め。一個づ呼出て。矢立の墨ふ指を染ぎ爪

押を捻させて。いぎとづうふ小六ふ遽与し。恁仕てひへば。異日ふ聊申もべきうゆ臣。在下就ち証人ゆてい。といく間ふ小六ハ熟。這老人ゆ打扮を着るふ。年ハ六十ふ餘るやし。人品有繫ふ卑しうるぞ。立着といふ袴を着て。縮緬の単衣の上ふ。褐色ふ紋附る羽織を着るゆ。腰ふ短き両刀を。柄下ゆふぞ帯こうる。小六いこれを听つも。肛裏ふ思へやう。原来這老翁ハ。年紀ゆも似氣ゆく。色ふ耽りて。這婦人を愛さる餘ふ。恁罵々しく追手を出して。犹飽足ゆバ自己まで。這山路ゆハ来しゆうんと。微笑くを色まハ見せば。原来和丈ハ是ゆう女中小鶏女郎ゆ御主人ゆふ。滓の次第を听ゆ。ゆ〜こへハ。今更めて報るふ及ばず。危急を見るふ忍びがく。一臂の力を尽しこうふ。這衆客ゆ縁故を。克も思りて在下を猜ひ。剰理不尽々ふ。狼藉ふ及び故。人ゆ〜如く投懲しこうゆ。薄痍を負るゆ的もあるで。僥倖うして死ゆ至らぞ。這夏後日ふ疑論もあるゆバ。足下ふ仕と預るく。療養を加へ勤めて。宿所ふ送り差

もべ〜。且又所証の一札ハ。慥ふ受拿すしこうう。和丈ゆ証ふ立るく上ハ。禀べき所ゆ。ゆバ暇を禀をこと立去んとするを見て。與六作慌忙て立塞を。且等ゆへ。そハ性急こ。抑你ハ何國の殿ゆ。御家臣ゆそあるそれゆ。唯一個這山路を。夜を犯てハ越ゆふらん。眷属らるふゆん年紀も。犹幼弱き程るふ。武藝勇敢古々ふ秀て。人力ふ及ばぬ妖物を。輙く制へるふゆ。驚嘆ふ餘あり。希々こハ名乗ゆへ〜。この婦人ハ小可ゆ側室ゆてハあるゆ。その妖物ふ殺さるゆバ。いくぞう不便ふいんを。御庇ふ憑て甦生て。その怡悦ハ禀も更ふそ。最有難く辱〜。るを這仮ふ争でハ。別さまらせひうん。這處ゆう宿所へ遠くもあるゆバ是非ふ伴禀べし。ゆぞ〜せるへと。苦々ふ乞ふを小六ハ听敢ぜ。そハ歓び〜きゆるへども。去向ふ急ぐ所要もあるゆバ。復こそ見奉ふ入べき。在下ハ東國の浪人ゆそ。諸國を遊歴〜文武の修行をする者ゆれゆ。名告こうとも何らせん。放ちて去せらるべ〜。といへども與六作一切許さゆ。尚るゆふ詞を盡して。最速

よろ作
ちとみ

宵怒與六作謝恩
小六

天明ふ間もなくなれば。空腹ふこそおいびべなれ。切てハ田舎塩梅の。雑炊をぞふ糸こせん。
とて放つべくもあらざれば。小六も剛才ハ推辞うもて。やうく。その意ふ任せなれば。與六作
主從大ふ歓喜び。農夫们ふ分付て。痩負を扶けて跟よう歩ませ。自ら小六が前ふ立
て。麓の方へ回て去ふ。短夜間無く明去て。一坂ふ至る頃ふハ。彼誰候ふ成ふ。开
處よう楳原まで。僅の行程なりなれば。就て宿所ふ還て着ぬ這間の事累し
なれば。畧きて這處ふ記さぬを。看官冥く猜とべし。

第五回

恩を受て忽ち恩を忘る

禍を救て却て禍を得る

話表。荘官與六作ハ急く中門を開ゐて。小六を聖昌院の庭よう迎へ恭〳〵
上座ふ乞進め。且快茶菓を管待を中ふ。小鶏も前夜の疲労を厭ふ。包湯
の指揮かどて。間ゐく朝飯を羞ちふ。小六ハ屢揖讓して。徐く箸を把ふ。

きう山家のゆゑなれば。鮮魚とてもあらざれど。主人ハ富てとおぶ〳〵そ。膳椀調
度も看苦しうもぞ美味ふ于魚を用ゐ。菜蔬ふも意を配て。早熟ハ茄子ハ小
きゝ。誠を表を心のもて。理無く盛てあり茸や。乾う海老ハ伊勢の海ふ腰の
屈う老叟も色ふ。深く深う蘿蔔の梅漬。茶漬ふ迄も意を稠て迭代ふ
奉走ちう。珠ふも代りの想慕婦ゞ。命の恩を報ゆるべ。小六ハ快うもど。他
の好意を辞ても敢ず。辛うて吃竟ぬ。東道ハ狼を改め。僻地の便う紀
口誼を演べ風爐をも分付なれど。猶今雪妾時沸難なれば。率且那首ふ離
舎で徐ふ疲労を想ハせる。前夜ハ終宵眠てるぶ。さうそハ草卧ゐ
小可们も姑且ハ身の暇を既て休息ちうふぞいたん。いでく。苦懇ふハ金
も有繋ふ辞ゝ難て。那離舎ふ入て見れば。清潔ある衾衣を鋪て。挽木の枕を
有なれば。旅の調度を開處ふ取納れ。就て眠ふ就うれども。心頻ふ焦燥く。

帰去んとゝ思ふを以て熟睡をろかも至らるゝば要時あるて起出るふ。巳刻ハ既過うゝ。嗽ぎすゝ氣色を所て。与六作ハ疾く出来アろ。こゝ最早くも寤ゝ。水風爐も恰好候ゝ。いざ浴させのへゝとて。婢女を呼て浴衣を携せ。浴室ふ案内させるるとゝ。小六ハこれを推辞ぞゝ。そハ御馳走頂アこゝろ。徒らゝ允さるゝべゝとて。浴室ふ去て湯と浴竟て。就て出来るその間ふ与六作ハ衣服を更め。袴を着て書院ふ出ゝろ。小六を請ゝて夜来のるを。犹云云ふ歓び謝ゝ。早坏盤を措排べふ鶏ふ酌を把せゝ。連アふ羞めて止ざゝゝゝば。小六ハ酒を嗜やゝ。自ら戒めて多く用ゐず。屢辞るふ下戸を以て。言豪ふ舉動さるゝども。與六作ハ所容ず。前夜夾ひる里人の。甲乙をも喚来らゝて。死禮の罪を犯も賠させ。迭代ふ献酬ゝて。只頑強て勧めるるゝば。料らず數盃を傾けて。不覚ふ時刻をぞ移ゝゝる。與六作ハ負を添んとて。ふ鶏を強て

促ゝて。筑紫琴を弾すふ。辞ず難て琴を拿出て。想ひあゝ磯の伊勢ハ海深き縁を折反ゝ。謡ふも鄙ふハ珍らふて。谷の戸出る黄鳥の。初音ゝ異ふ所ゆゝゆゝゝゝ。東道ゝ先聲立て。やゝと誉るふ負醒けるゝば。小六ハ心中ふ瓜弾して。辛ゝて酒坏を辞ゝ。夕饌を果せる時候ふハ。夕陽既ふ傾きて。晡時下てふ微ふゝ。徒ても這首を立出んと。心焦燥のゝてゝるゝば。屢暇を報るゝども。与六作一切肯ハず。又ゝゝふ扯らるゝて。心ゝゝるゝども今宵ゝゝハ。這里ふ宿ゝふ決めけゝ。抑這小鶏と云ふ婦人を。怎麼ゝゝる者ぞと。索るふ。前編第三集ふ現ゝゝる。遠江國曽根川の獄舎長。塚見木兎六が女児ゝて。同郷の某甲と婚姻の約を做ゝる頃。木兎六ハ不意も。木綿張荷二郎が謀ふ的アて。不覚の死を遂ゝゝば。領主曽根川權守高春。事情を穿鑿せるゝふ。木兎六日屬囚獄人を諭訶ゝて。賄賂を貪て。法を私ふゝゝるゝども。餘盡あゝ露顕るゝゝば。高春の

憤深くして。家財を没収せらるゝ人。その子共を追放せゞ。厳く令せ付れべ。小鶏ハ嫁ぶべき約あるども。快く訴出ざるふようて。竟ふ遁てゝの能ひ領分境を追出さるゝ。兄某甲ハ日屬より。放逸無慙の者ゆゑ。怨る折ふも此も怯まず。妹ゞ姿色あるを以て。疾く妓女ふ售らるゝ。伊勢の白子ふ渡さるゝて。幾ばくの年有餘を過しぬ。然るふ這與六作ハ。去る歳妻を失ひるふ。年老ゆゑ仮ばもあく。好色の心遣方あるくして。寝覚徒然さるゝまゝ。太神宮へ詣し還路。自子の青樓ふ旅宿して。件の小鶏ふ相馴るふ。最も心ふ恪ひしゝ。若干の金を投じ。他ゞ身を購ひて。宿所の花とハせしゝ。さるども小鶏ハ心操極めて多淫なるゝ人ふ。廓の習俗虚言を。実ふ言と思ひ錯て。年古び
る山里人ふ。購ひ出さるゝ。生平ふ不満の意を抱きて。屢不義の滓あるども。与六作ハ只管ふ。他ゞ色香ふ惑ひるゝまゝ。些少もこれを悟らず。唯

ひゝ任ふ随ひて。更ふ餘念ぞなゝるる。素より這与六作ハ。男女二個の子あるゝふ。弟ハ不幸ふして身亡るる頃。他ふ嫁しるる。姉女の夫ハ厳ゑて帰来ゑ。程もなく死失るゝまゝ。忘像見の外孫あるゝと。幸ふ家督と定め。與六九郎とぞ名付るる。今茲ハ既ふ十七ふ倣ぬ容貌もさぞ醜ゝぬゑ。小鶏ハやゝ
共誘ひて。他目を竊みて會ゆゝふ。竟ふ膠漆の中となるゝふ。阿漕ゞ浦の網あるゝふ。度重るゝ伊勢人の。非談交りふ壁訴訟して。主ふ悟ゝも有るゝ。与六作もやゝ听知て。さハ非しとハもゝふのゝ。通路ふ関を置て。此ニも由断せざるゝ。二個ハ鬼胞を抱きて。暗くふ言合せて。他郷へ亡命せんゑとなゝし。已ふ出んとしるゝ。夜共怎ふして知るゝん。那老猿猴の妖怪ゞ与六九郎ふ身を変じて。術もなく盗ゝ出さるゝ。小鶏ハ小六ふ醒さるゝ。近ハ只管與六九郎ふ侶ひて。家を奔ることゝ。少ぞ有る偖て家ゝハ回ゝるゝ。身

ハ妖怪ふ犯さるて。面目を失ひろふ。俺を救ひ〜小六を看るべ。玉を欺く少年ぞ。那與六九郎ふ比るべ。雲泥萬里の風流男なれべ。慾火忽ち動き出て。希で這人ふ譚らハ寄て想ふ意を所聞つ。侶ふ他郷ふ奔ぞるべ。這頭ふ在て古老爺の机嫌を執て食人ふ猜るんとろ遥ふ勝ぞて寔ふ一事両用ぞと已ぐ任意の心算計を。快ぐも定めとろ〳〵るべ。與六作を哄騙〜て。小六を抑留るんぞを。意を盡して策ぞろう。間話休題。小六ハ初更の時候ろ。又那離金ふ入て。另ふ做べきるもるるべ。快く枕ふ就ろ〳〵るふ。晝間よろの醉甚く裟〜て。おめハ必要時ハ寝入ろる。夜半過る頃枕方ふ人の形氣すろふ驚きて。不図眼を開く看てあるべ。薄暗き孤燈の下ふ。女人一個ぞ立有る。そも甚麼的ぞと熟視るべ。亦是侍妾ふ鶏るべ。訝〜きるも限るれど。怎ふする欲と驗ぞろ。犹熟睡せる面色〜て。覘いるとるも他ハ知ぞる。和ら衾を推開きて。入んと〜て

有繋ふ得入ぞ。聲を悄めて耳根ふ寄ぞ。や殿。お眼ハ寤るんぞや。一大事の侍るを告るる與来ぞろ。とのふよふ小六ハ忽ち駭き。起直りて容貌を端〜。そハ甚麼ものあろやらん。快々目今報らるべし。さハあるべろ男子の獨寝る処へ夜を冒して。和女郎ぞ自ら来ぞそハ。前夜荘客們ふ猜忌るる。虚名を雪ぎ難るべし。急要るるぞハ。明日詰且明々地ふ听べきぞ。唯疾回ぞ去べ〜と言雄々〜く窘るべ。然め〜氣ふ秋波せつ。そハ又甚ふ好意るる〜。前夜金を助けるハ〜。恩ある君と想るろ。疎畧るる〜じと崇めつ。省るべ想ハ仆の容貌。這世ふ比類ある栲の。衣ぢつまハ累ひじの。理知ぬふもあるぞと。唯躬ふ決て苟且も。忘るる交野の夕紅葉。赫〜さも怎麼るる毛。怎ふ〜て留めあべ。這一條の冤緒ふ繋〜想を听えぞ。さて左も右もある坂や。児掌柏の外面裏。繁き他眼を辛く計ぞて。婦女子の大胆ふも。這首まで繋り佇〜と還

ゝとのこまゝ曲あるよ。御恩ゝ報へ奉るもべき。一大事の仕ゝど。卒爾ゝ争ゝ禀さん。やゝ唯要時ゝん傍側ゝ卧せて想ひを散せゝへとゝひつ被衾引揚ゝく。鑽入んとゝたゝるゝ。聲色ゝ溺まゝ大丈夫。争ゝうゝゝゝ靡くべき。ゝ六ハ怒ゝ堪ぜゝて。不慮ゝ聲を苛らげ。這衒妻奴ゝ昏きゝう。抑俺を誰と思ひて。ゝう艶言を吐散ぜゝ。昨夜踰べき山径ゝて。ゝ係ゝ獣類ゝ犯さゝゝと。首ゝゝ忍びゝ救ひゝゝゝど。夜の山中ゝ嫌忌を避て。屢去んとのひつゝを。ゝ係ゝ與ゝ抑留せゝゝゝて。年紀ゝも愧ぬ聲色人の。家ゝ一夜を明ゝゝ。千歳を経ゝゝゝと所思ゝ處ゝ。ゝ怎ぜゝ因ゝを讐めて報い。天地ゝ慚ぬ俺潔白を。汚ゝて不義ゝ陷んゝゝ。人面獣心とゝ係ゝ們をゝゝゝ。ゝ怎ても懲ぜゝ。懲ぜゝゝと。拳を向上げ粗ゝ任せゝ。頗二ッ三ッ喫着て。ゝ肱把て曳立つ。両戸の外へ突出ゝ。快くも引閭鎖ゝゝゝれば吐嗟とゝゝゝ。竊音ゝ泣入ゝ聲の隠々ゝ所所て。怎處へゝ去ゝゝん。ゝ後ハ音もせぞゝゝゝぬ。

ゝゝゝ小六ハゝゝも怒氣収らぜ。益ゝゝきゝ奴ゝ繋界ひゝく。瓜田ゝ靴を結んとゝゝき。ゝぞや剛ゝゝう出去べゝとて。行裏を曳寄て刀を提て立上ゝゝゝ。又熟ゝと考ゝゝゝ。這家主與六作とゝゝん色ゝ耽ゝゝ無慚ゝゝゝども。俺ゝ對ゝく宛恨もほゝゝを婦女の故を以て報ぜゝて去ゝ時ハ。訝ゝて跡をゝ逐んゝゝも倒面倒ゝう。ゝゝ那婦女も那侭ゝ猜ゝゝゝ後竟ゝ。汚名を被ゝ端ともゝゝん欲。如ゝ天の明ゝゝを等て。ゝゝげゝく立出んゝと。徐ゝゝ想回ゝ。自已と怒を宥めつ。舊の如く ゝ枕ゝ就て。寝んとゝゝゝど心治らぜ。既往向未ゝ滓ゝゝど。業ひ續けゝく徒ゝ。毒へ果ゝゝ五更の鐘ゝ耳を傾けゝう當下。忽ち外面ゝ人聲有て。常ゝ非ゝ數名の足響。這方を投て寄ゝゝ似ゝう。原来盗賊の入来ゝう。但又另ゝ縁故あゝう由断ゝゝゝべきゝ非ぜとゝゝへば。刀を把て腰ゝ帯び。行裏を引着て。脚場を料る火速の身構。燈火ゝゝと吹消て音をも做で覘ひゝゝ。焦松提燈見ゝと。雨戸の邊

間ふ影所見て。追緝稠る多勢の緝捕使は。頭人めきたる馬上の一個。鞍頭ふ衝立起て。癖者ハ這處ふ在とぞいふ。快稠今を。とのくまくふ承りやとのふたる疾く。雨戸四五枚打碎きて。脅ふども内ふ火をぞふ點ぜば。障子一枚燒ふ明て。静かへりて音もせざ。逃亡たると訝たるぐらう。焦松を振照し。找上りて見てあれば。威風凛然き三個の壯士腰の刀ふ手も係ぞ。屹然と立て居たるしるば。意外ふ氣を呑まて。科一捫着くたる。小六ハ聲を振立て。你們ハ是甚麼る者ぞ人の睡眠を驚して。怎樣をせんとする。仔細あらば徐ふハ案ふ盗賊なるべし。とハいせも果ぞ馬上の士人。物ふハいせ快拿へぞやと烈しき下知ふ夥兵們。思ひ回して多兵を憑を。卸諾ぞふと呼たるく。手ごとふ十手を閃めるして。競ひ蒐て擊んとすると。引外して操仆せば。透きぞ打稠む十手の電光。脫首丁と踢揚る牙ふ。敢なく落して躊躇たる。ことふハ懲ぞ左右たる。沮んと蒐たるを組せも敢ぞ。右ふ拄へ左ふ拂

ひたく。手煉を尽と柔術の精妙。精神まそく加て。怯むと那這項髪掴み齊一撞と投飛と。勇力ふ避易して様よる下へ潰と退くぞ。甲斐なると馬上の頭人身を操て下知するふぞ。再も齊一群る蒐て。矢場ふ抓み着んとすると。物々しやと。任ふ前ふ找ミ一個を拿へて。狗子の如く提げ横ふ。競て稠入る七八個ふ。門の如く押着て。一聲吼て押出せば。金共侶ふ兵兵きて。様頬よる押落さと。將棊倒をする像く。打累りて蠢動きたる。小六ハ勝負を好まざば。嚇して滓を鎮めんと思ひ。腰の刀を晃て。と引抽き。小脇ふ側めて。呵々と笑ひ。推参なる該死的奴才ども。几百個ふて向ふも。搦捕ふ俺まいあるぞ。所望なるば太刀擊して。現世の暇をとらせんぞも。奴才們ふ頸骨と。這黄銅の浄手盤と。何ぞ堅硬きと。惟ふ自ら力を脊て。過失もあると。飽まで。罵て散して。軒端ふ吊せ。龍頭より水を吹べく。造るる。殷大なる浄手盤を。刀を揮ひ。渫矢と斫る。拳の牙ふ欠ぞ。滯らば。然しも大じき

黄銅二重を。瓜を三個ふ破さる像く。見事ふ斫て落ーこれば。那方這方へ揑と轉びく。水ハ颯くと飛散る。事の氣色と本事ふ怖畏て。吐嗟とだろ駭き呆まて。誰ら一名も近着くべき。貪々人を眉ゆつ。裏崩ーて中門の。外まで逃さも多ろろ。小六ハさそと冷笑ひ。刀をば鞘ふ収めて。那頭人や著招き。抑和殿ハ誰人ぞれが。在下ぞ宿やる。中門の内ふ馬を乗入ま。剝理不盡ふ搦縄んとハせらるやらん。大人氣ろ。夜夜夜夜の景迹盗賊们と案ひの外。看まが故ある武士ふ肖ろ。除非在下罪ある。ふもまよ。一言の仔細とも演ぜ。雑人们ふ搦そんと。指揮せらるハ怎麽ろ故ぞ。武士の作法を知まる故狩況や犯せる罪條ろ。それば索ふ掛らんやうもゆ。然とも只得拿へんとあらば。雑人們ハ命斐ろ。且快和殿と勝負を決せんろふ。と詰問ハ。理の當然ろや急促やる。那頭人ハ愧らひて。慌忙ーく馬ろ飛下ま。找ま向ひて一揖ー。いそく趣ろ。在下ハ掛橋和多六と。垣内殿の家臣ろ。今日

ーも這家の主與六作。代人を以て訴る旨ふ。和殿を捉へく。浄の子細を糺明せん與垣内殿の命を以て。長臣ろ在下ふ傳へーば。在下其職ろを以て即ち暇兵を引率て。怎ハ推参ーろ。ハ論罪條の委曲を。在下ハ孰も知ねど。畢竟騙局盗賊の類と。所做ろ故を以て。敢て一言の問答ふ及ば。形の像くふ押寄て。搦拿ーと。ーろーー。然ろふ和殿の武藝量敢決めて。草賊の類ろれふ。いそく呼も理あるふ似ろ。先未歴を告らまよ。品差ふよりてハ。渥捕の沙汰を。宥めて料理ふ旨あるべーと。聞て小六ハ不審散ぞ。那與六作奴ぞ怎の與ふ。俺を盗賊と訴へろん。方僅小鵄が光景といふ。意得匝き事のまるまで。今更問んやうも無まば。怒を押へく答るやう。在下ハ東國の浪人ま。昨夜伊賀國へ赴んとーろ。山中の徑ふ迷ひく。料らずも這家の東人ぞ侍妾の。必死の難を救ひ得させて。宿呼ふ送んとーろ途ふて。與六作ふ撞見まば。婦人を遮與ーて去んとせーを。強て留めて

春玉堂印發

春玉堂印發

管待をもなす所為なくて今宵一夜這里ふ宿せるべし。怎の罪科らあるべ
うらん。唯訝しきハ與六作ぶさぶらふ在下を讐として。踪迹ふきみを作りて訴出し
ハ案外りて回もぐも奇怪ふ。快く與六作を呼出さまよ。毆きて仔細を詰問ぜん。
と寃氣を含めう勇士の辨論詐偽ふも所ふえぶハ和殿六も訴てあらう所が如きハ
和殿の災難。寔ふ氣毒千萬ふ。然ども在下ハ。訴訟を聞べき職分ふられば私ふハ料
らひ難し。左まを右まを。垣内の城まで来ぶて陳謝せられよ。即ち亭主與六作も。
那里へ召率去べきふ。世の評ふも听及ぶをふ。俺主君俊泰卿ハ明断尤敏捷ふて。
當世の賢者といふ。そうとうぶを。そうとも寃枉の悔ふハあらじ。但し囚人の法ふれば。
両刀を遞與さまよ。索ふ和殿の武勇ふ免じて決して掛ふるもあらじ。是在下が寸志
ふて好意あり。げふひふをば小六ハ呵々と打笑ひ。潔白ふる在下を囚人といふ。
意得がたし。除非召まを垣内殿へ赴くのゆらんも。武士ふる者が両刀を他ふ

遞與しと阿面々と手を束ねて赴くべき。そハ其殿の御家臣ふて罪被らば
さも有べき歟。俺ハ他國の浪人ふれば。垣内殿と甚麽とふ思ふん。和殿ハ一國の
内ふ居て内外の差別も知まをあらじ。ふる面倒ふる事あらば赴らぬとて
も何とうぜんと最荒らふ言懲せば。和殿六險不迷惑して失言の罪を只管
謝し。只左も右も在下と共ふ一遍垣内へ至りて陳謝せられんもと頼ふ稟を。
と啣言がまし。いふよ小六ハ徐く會得ひ。明日ハ伊賀路へ踰んとすれば。垣内へ
去ハ好まし。ふて盜賊騙号と猜まをてい。這侭ふも乗置ぶしらば直ちふ赴
らんと行裏と搔把て。掾より下て草鞋と着まを。和殿六ハ指揮して仁介
與六作ふハ哭験の條あり。家内の男女と残らず捉へて後ふ跟て赴くべし。
快くせよといひ繋て。小六ふ仇と一揖して。馬ふ内りと乗移まを。騎兵ハ住々と
言稟して。過半小六を圍繞ふ。護りあぐらふ引連て。垣内と投て回ふ。

此回拭長やうあるべど。楮數の定限ふ充ぬれば。看官の疑念も解ざるべど。姑く這處ふ筆を止めつ。畢竟小六が垣内の城へ到て。亦是甚麼ある話說ふあるべ。編と續ぎ卷と更て。第六輯五十一回ふ。分解ると看て悟らべ〜

開卷驚奇俠客傳第五集卷之五終

附言

曲亭翁が編次せる。俠客傳二十卷。偏く世ふ行るれて。犬打童子もこれを歡喜び讀ざるふ〜。然るふ四集發兄の後。故有て稿と止。其人竟ふ物故ふ至るふ。寔ふ惜ひべ〜。今茲書肆群玉堂。看官の渴望切なるを以て。余ふ其編と續んを乞ふ。然れども那翁ハ近代小說の名家と呼ばて。其編述の書數十部ひる。所謂老練の筆なれば。爭ふ是ふ伯仲ちべき。虎の半身狗と寔ぜば。却也ある世の胡慮あるべ〜とて。屢推辭ふ〜ふども。猶許さぬして。假ち故ふ再遍其書を閲するふ。崖畧の脚色ハ。唐山三三部の小說ふ起原せると所看ふ〜べ。そ〜ふの趣ふ擬へ〜。尚亦作者の隱微を推し。前編の樔子と深く味ひ。豹の一斑と看るふ足るもあらん歟とて。試驗ふ本集五冊を續編して。群玉堂ふ授へ遣つ。さハ〜瑣細ある事ふ至るとハ。前編作者の腹稿と知べき

あらねば。那意に差ふのも多うべく。且短筆に情態を損じて。盡されぬ所もあるべうべく。看官の譴責を寛解んと與に。愚案をこの簡端に附して。勉めて前編の意を誣ざる由を陳謝す。猶疎闕の條どもは。伏て看官を希ふのみ

○前編四集第四卷。垣衣が上墳の途に。乞丐に撞見る條ありて。幽九郎と名簿を附け。幽九郎が第五編に分解べし」と注しぬ。這幽九郎。甚麼ある者と詳ならず。暗に案ずるに。疑らくは三集第五卷に所見る。曾根川の囚獄長塚見木兎六が子なり。我兒は放蕩無頼なり。親の東西を東西とも思はず。色と賭錢とに使喪ふ」とのべり。者欤。さるは木兎と梟と。其名の類を推て對する意なるべし。其子八九の邊に在ては。荷三郎と愛心なる一條は。妙なりとも所あるべし。こゝと兼勝が旧僕敵介とを。信夫と認て同悪を封助る楔子なり。更に木兎六が女兒。小鶏を出せり。這一條は決めて

前作者の意に違ふべくあれども。別に由もあるべし。姑且かくの物しるす。

○本集第四十二回より以下。婚姻の條に。庚帖は事をしくるに。裏面に憑る唐山の小說中の趣あるを。前編の作者。さあらぬに採用べく思へり。三集第四卷二十八回の末に。姑摩姫が如意宝珠院なる。苫子が祈禱の塗牌を看て。八字生來といふを知るを嘲る。且その夜惜字箱より。應永四年の旧暦を索出して。苫子が八字を序次るあり。是全くその組漆と見えられば。今も猶これを更めず。然れども本邦の婚禮は。未庚帖を用ふる例あるべし。風俗大に齟齬して。酷く手筆に困しむ。是前作者の尤筆に及ざる処なるべし。看官幸に事情の尽さるを咎ひなかれ。

○本集第二卷四十四回より。第三卷四十五回に至て。婚姻に新人を換る如きは。足利管領家などのうへに。有べき事情に非ずとはいへども。是亦裏面に

踏へる。唐山の小説中の滑稽あるを。前作者既に採用せんの腹稿ありきと見えそ四集第三十八回に持永が苫子に會るゆを現して。滑稽を尽くるハ全くその楔子と見えるに苫子を特に醜婦とするも。亦持永が蠢愚を呼ぶ。本集の緒渋と所看とが今も亦其意を得て。那回專滑稽弄戯を主とするに。その及ぶる処ハ例の短筆の故あるべ看官亦復恕覧せよ。

○前作者第四集三十六回に至りて北畠木造中將俊雅といふ人を現し。其鼇頭に自注して曰俊雅或ハ俊恭と作て垣内の城主とし。又俊雅に作るものハ木造の城主とし。俊恭。俊雅。共に満恭の弟ニ。是一人歟二人歟未詳あらず。案に是一人なるべし。只傳る所同じからざるのミと云て。是ハ酷じき誤謬なり。這首に俊雅とする人ハ木造の城主にて。京都へ出て足利氏に屬従し。後に正二位權大納言にあるべし。左中將俊恭朝臣のゆゑ。又應永中の國司ハ。満雅卿なりと。前編第二集に満恭とし。且姓名録の頭に自注して。満恭を北畠系圖北畠記等に満雅に作る。南朝記傳及伊勢の巻。その他も多く満恭とし。未熟ゆ是を誤りとせり。是亦満雅卿の方を是とすべし。余が看し南朝紀傳に先右大臣顕能公の息。正二位權大納言顕恭卿。その子左中將親能卿。義満公の諱の字を贈られて。満恭と改められしる由ハ。第二集十五回に前作者の所説の如し。但し此人ハ應永六年和泉國堺にて。大内介義弘が城を攻て。戦死せられしゆ。然るに満雅卿とハ。同人なるゆ事明白なり。満雅卿ハ満恭の弟にて。應永二十三年御即位の事。前約に違ふを以て。義兵を揚られしゆ。當時の國司なるゆ顕然なり。俊恭卿ハ満雅卿の叔父正三位顕俊卿の二男にて。雅俊朝臣の兄なり。顕俊卿の長男俊通とのゆゑに早世せられしる故に。二男俊恭卿を顕俊卿の養子とせられしるなり。この事ハ論語顕俊卿ハ庶流にて木造の鼻祖なり。故に俊恭ハ足利氏に從ひて在京せられしゆゑ。国司家と称せしる。顕恭卿ハ顕能公の嫡子にて顕俊卿の兄弟なれば国司家なるゆ著明なりとて又大系図に顕恭卿の子俊通その子と俊恭ハとしるされ俊通朝臣

早世せらるゝなり。俊業卿はその弟として家を継ぎたるなり。准養子の類と見るべきの誤あるべし。雅俊朝臣は俊業卿の弟にて。顕俊卿の三男なるが。後に坂内の城に移りて。坂内一家の始祖なり。あるいは誤り大系図などに雅俊は大河内顕雅卿の子にて木造顕俊卿の養子とあれども由もなきことなれば又何の為に雅俊を養子とせらるべき但し顕雅卿の子にして顕俊卿の弟なりしと満雅卿の弟とする説も誤なり。

常に上京して在京せらるべし。満雅卿と志同じくして。故に應永廿三年。満雅卿義兵を挙らるゝの時。父祖の遺訓を背きがたく憤りて。一番に木造の城を攻落して。留守の者どもを逐出し。雅俊朝臣をして。其城を守らしめたり。其後俊業卿。京軍の先陣して。伊勢に押入り。先木造の城を攻て。雅俊朝臣を追落し。會盛昔の恥を雪ぎたりと歎びて。即其城を守らしむる由。かねてより。俊業と雅俊とは同人なりと知るべし。

さて垣内とは所なり。俊業卿

雅俊朝臣共に居城にありしなり。前作者既に坂内を誤りて垣内とし。上に強てこれを更めぞ。假に一志郡榊原の垣内の事として。俊業卿の居城木造のおもうげを寫し出せり。これを更めんは容易けれども。さて地理の里程ふたつ符はずあるべきに。話説の條理錯乱して。倒紛れ〳〵なれば。さて又称光院の御即位に諸書に載る所。共に應永十九年八月なりと。獨南朝紀傳に。應永二十年と記せり。前作者は是に依て二十年の事とし。こゝにも惣来いくばくなるべきに。畢竟稗史の年紀なれば。更に是を改めず。伊勢の國司とは猶満業とし。雅俊とは俊雅として。京へ出て足利方に攀じる人とし。更に俊業を現して。誤謬の難を解んとす。遮莫善人を悪人とし。忠を不忠と誣る類は。稗官家の禁戒なり。前作者も屢論じ。これは後集に至りて黒白とは判然と分解さるべしとなれば姑く。應永あらぬ應永の年頃。満雅卿なるべき伊勢の國司。満業卿なりて雅俊

あるん

朝臣あらぬ俊雅京に在り。木造の城主俊兼卿あらん。垣内の城主俊兼。垣内ふ在城せられうとゐて。強て咎ひうゆ勿まし。抑そうあき草紙物語ふ。系譜を索ぬ。実記を探るん。原是要あれるゆあるうへふ。前作者の誤失を露とい。極めて情あれに似るまじども。前編の旨趣。南朝の演義を作りて。忠臣の餘憤を散ぜんと企て。畧年月を正史に証り。確ふ結構くうる書あまじ。其錯失を考訂とるも。却ていい前作者の意あらんうとて。徒贅言とも注しうる。

○垣衣の信夫あり事い。その名の垣衣。即てまのぶ草あるゆて。看官も大畧い精せあるべし。これを隅屋安次ぶ配偶とする由も。前作者の意あるゆ。三集第廿三回ふ。仙女ぶ姑摩姫ふ示しうる句ふ。垣衣黏石。とのひ。同第二十八回安次が語ふ。我身ふ拿て大きあらぬ義理ある女子。といるゆどふて知まうう。又稲城守延い。安次ぶ艱父蜂六ぶ隊長あらんと推知しうまじ。本集ふ守延が配偶のゆを説くうゆと現しく。

後ふ至りて命を聞人のあうる伏線とい。又遠江洋の尼難い。同第廿五回。安次が往事を話る語ふ。公役の伴ふ立る途ふて。憶ぜ必死の尼難あしくと。脱まて浪華の浦ふ未まうう。とのひ。同廿八回ふも垣衣ぶゆと安次が話る下ふ。由緒ある武士の女児かまじども。過世ゆくて小可と。窮阨と倶ふ。あどのくるふ。安次い英虞将曹ぶ部下ふて。信夫と同船して鳥羽の港と出るふ。海上ふて風浪う海賊うの難あり。由い知まうう。是と木造親政ぶ所為とうるい。前作者の意ふ背くふもあうゆど。後集ふ思ふ旨あれば。二集第十九回。鳥羽出船の下ふ。小六ぶ信夫ぶ警る語ふ。「那船中い総て敵地と思做て。昼夜由断とべうぞ。但ふの船中ふうゆぞ。昨もゆふも木造ぶ與ふ狗とあうて。這方の動静を覘ふのあらん」といひ。又「然とて。海賊の患あらんとべうぞ」あどのくるふ依て。海賊の一條とも附しうる。這海賊の姓名出所。且庚吉ぶ落着い。後集の發兄と等て知べし。

○荷二郎が善忠を復讐を助る縷とあるこるも。蓋前作者の意思非るべくもと。後集が愚案あるを以て。客店の月四郎が照對が取做こう。且その讎悔の景迹も。目四郎が肖こうと哂う人もあるべくもと。那は一個の情徒の。這は机変の騙賊がそのの大小同じうもと。且向未の活用も。那とは酷く異るを。看官宜く査べし。總未這書は初発こう。新田楠木を相對こうる書法がそ。小六と姑摩姫とを。一部の主人公こうして。對こうるようして。彼此迭が照對あり。英直夫婦が維盈夫婦を對こう。安次が信夫を對こうる類是多り。今亦これが擬へて目四郎が荷二郎を對こうるの情由も次くが并ぶるを看て悟るべし。

○鬼瘤越の妖怪を。猴猴こうるは。前編四集が猴猴あるして。奇こうるぬ事あるが。前作者。朝夷巡島記近世説美少年録あるが。數此類を現こして。自注がその故を陳ずこうるもあるして。其趣も大同小異あるを。措くべくも。ひこうるども。後集が遁れ難き奇譚のあるを以て。只得こうるを出こう。然るども。後が至ずして。大が右の書もと異るこうるが。第七集が分解を听べし。

○小六と姑摩姫と撞見の一回は。前編が作者の注こうる如く。本傳第一の関目あるこうるから。本集が猶盡こうるは小六が伊勢を立出こうる。應永十九年四月初旬のこうるが。安次が八九へ来ずこう頃と同歳月の由。三集第二十四回が。作者の自注あるが如し。然るに應永二十年の二月赤阪の紙昏姻の條とは。半年有餘の差あれば。這間が必小六がこうが事あるべし。故が俊泰卿の傳が合せて。堀内のこうを起こして其歳月を調へ。且後集の組染こうは看官姑く堪忍びて。後集の高評を賜わんこうを希ふと云

開巻驚奇俠客傳第五集巻之五附言終

蒜園主人再識

大文堂藏書印

全篇作者

蒜園散人

柳川重信

繡像畫工

○開巻驚奇俠客傳第六集五巻　右同著　近刻嗣出

本集ハ第五十一回より第六十回ニ至ルまでハ小六が事を叙らまくさう始ハ伊勢の垣内ハて小六が偽似の猜忌を被ふ事を説出し中ごろハ安濃津の妓院にて二人の俠者名妓を爭ひく剛力を試ふ事を巻終ハ初集ハ見えそる新田真方朝臣主従の行方代ゑ且補延尉正勝主の事まぐるをあハして奇詭のさまを究きてる草稿既ハ成ふまバ追つぎて出板まべし看官まゝ高評をゆふべし

京都書林　二條通堀川下ル　越後屋治兵衛

東都書林　大傳馬町二町目　丁子屋平兵衛

浪華書林　心齋橋筋本町　河内屋藤兵衛

心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛板

新増補

萬代早引節用集大成

此節用集ハ字数駢ハれ悟。文字を尋るに仮名数の早引ハ。其中に天地神佛官位人倫衣食器玩草木生類姓氏言語等の部分ハ。仮名附ハ欲学家にとりて改め。又行末ハ字を階書時ハ傍の真字ハて筆畫の類聚を礼ふ。和漢官職ハ名義現後堂上方諸侯大名衆ハ郡毎ハ御家領国城主ハ名ハ屋割名ハ寺社神社佛閣悉く国所ハ附ハ本系統の異名を礼ふ

薄紙ハ本冊ハ笑肯表紙ハて至極奇麗に仕立机上ハ置びくハて甚便利至妙ハ

孫爰姓氏尚時何國諸侯の中に有事を巨
細小記し。巻末に諸侯文手形を案文男女名頭相性
年代六十國諸国一ゝ官都名地所官用名其外
重寶の支数多衆。既小漢土字書ふも凡四百三千余字五
ゝ。悉く紀憶とる者稀少。本朝の熟字俗語小至て
驚愛事に。少し取扱ふ文字と俄忘る事度繁今此
五代早引之字数拾一万余紙頁八百三十余丁ありつゝ成文字に
て。漏る事集録ふる古今未曾海内無双の節用集和
三都并諸國名産と書林行事寄て仕求メて法下ん

釋尊御一代記圖會

全部六冊

山田意齋豊秀考
前北齋老人圖画

釋迦如来の御父浄飯大王の御即位と霊端ゝ摩耶夫人の内
如来摩耶夫人の胎内小生と託ゝ事摩耶夫人摩耶と嬢ゝ胎内の
王子の出生次第と道師小呪詛ゝ條如来夢中の説法小母の子恩
と銳ゝ妻浄飯王藍毘尼園小花の宴と催ゝ人悉達太子誕生の奇瑞
悉達太子御幼稚ゝ菩提心と發ゝ謂釈迦提婆遺恨の始悉達太
子宮中と出て檀特雪山小難行ゝ正覚成道ゝて出山ゝ衆生と教度
妻迦葉舎利弗目蓮及諸羅漢佛弟ゝ成和解耶愉陀羅女貞心
提婆ゞ十悪須達月蓋両長者の信心流離王の暴悪釈尊御入滅五蘊
神力涅槃像の欣求ゞ都て如来御一代の事と記ゝ圖と如ゝ雖有讃不也

浪花　好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

前篇五冊　後篇五冊

此書八天智天皇の御宇小百濟國纒の兵と遺され吏と育くゝ狂大臣が煙臺鬼と成ゝ謂大伴真鳥兄と云く家國と押領せ奸悪大友白王子浄見原天皇と御合戰の次第金道の生立白虫大鳥の忠義雅明ぐ義心真鳥の奢移金道万苦と凌て文乃丸と復ゝ本領小安堵せ迫の寄吏と洩さず紀せ実録むて力編夫ゝ遺姫善と勸め悪と懲と使ゝと面白く新本也

同上

扶桑皇統記圖會

前篇六冊　後篇七冊

此書八人皇四十代天武天皇の御治世ゝ六十代醍醐天皇の御宇迄の公事の根元宮殿院の草創代々の人物の行条と紀と所謂役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明皇后良弁僧正弓削道鏡恵見押勝中将姫傳教大師弘法大師田村丸浦嶋が子小野篁在原行平業平小野小町僧正遍照菅丞相其外古人の実傳と採ゝ精く輯録ゝ巻ゝ國画と加ゝ重宝の書ゝ

新刻
増補萬代早引節用集大成

真字附　全二冊

節用集の善本數板を世に便利成享譽ゝ物形雖然ゝ尚用弘文字不足のうて隔靴搔痒四ひ遺憾少なゝ此度菅田先生丹誠苦心乃功と積ゝ其不足雅俗乃文字所輯録ゝ尚諸人日用の支と數多増加ゝ新板大成所做諸君必堂右ゝ置ゝ高覧と俗ん支所希而已

○薄葉摺出来仕者い間違用向奉希上候

増修續王代一覽

正編　北五冊　初帙十冊

此書ゝ人皇二百八代後陽成院天皇天正十五年ゝ一百九代後水尾院天皇元和二年迄三十年ゝ間の治亂支改乃沼草名人達士詩歌連俳香茶名僧知識の傳紀神社併園の興廢金銀米錢ゝ差分ゝ紀ゝ屬ゝ所ゝ但原書ハ出所ゝ挙ゝ所ゝ抑菴先生盡ゝ其本書ゝ引紀ゝ一支一句を胡乱ゝ支ゝ改ゝ紀右ゝ一考ゝ古の小史と良ゝ續編ゝ元和三年ゝ以後ゝ知度ゝ

開卷驚奇俠客傳第五集 全冊

善知鳥安方忠義傳

此書第四集四十回までハ故曲亭翁の作にして普く世ふ知処なり然るに曲亭翁物故せしまゝふりて竟ふ結局ふ至らざるを恨ふ堪ずの蒜亭翁其篇を續ぎ第五集四十一回より第作者は脚色の攅考にて彼意ふ遠ざ編述せしまるを五集五冊此度刊行を六集と既脫稿せしまるを近れ世ふ出し著らべし希くハ四方の君子ふ乞て高評を賜らば高評を賜くとい

右の書初編第四冊後編四冊ゝ山東京傳翁の編輯ふして開く世上ふ流布し一元面白き物作者物故せしまゝふりて竟ふ結局ふ至らざるを恨ふ堪ずの蒜亭翁其篇を續ぎ第五集四十一回より第作者は脚色の攅考にて彼意ふ遠ざ編述せしまるを五集五冊此度刊行を六集と既脫稿せしまるを近れ世ふ出し著らべし希くハ四方の君子ふ乞て高評を賜らば高評を賜くとい

右の書初編第四冊後編四冊ゝ山東京傳翁の編輯ふして開く世上ふ流布し一元面白き物作者物故せしまゝふりて竟ふ結局ふ至らざるを恨ふ堪ずの蒜亭翁其篇を續ぎ第五集四十一回より第作者は脚色の攅考にて彼意ふ遠ざ編述せしまるを五集五冊此度刊行を六集と既脫稿せしまるを近れ世ふ出し著らべし希くハ四方の君子ふ乞て高評を賜らば高評を賜くとい

甲陽軍鑑 合卷拾冊

一名武田全書ゝ山人作者公御一代の戰功事蹟を記し陣營兵伍の画図を著し本邦第一の兵書ゝ称ゝ仮編なり

浪華書肆 群玉堂主人誌

東都川關先生著

早引人物故事 全部二冊

此書ハ本朝の昔より近世ふ到り名將勇士ハ始め待哥連歌俳諧の達人風流俳優名妓いろ〳〵時代ハ安く記し故人を捜索るハ仮ふ倣ふ物の乙

同 誹林沾凉大人著

近代世事談 全部五冊 合卷三冊 後篇近刻

此書ハ東山殿より朱呉服食菓草本花菓器財万物近代来所ハ年暦備流書画待歌連俳香茶生花接茶及び世之居ふの起原人倫雜事年中行司故実ふ何の頃より初まりしことを委くしるし

一名萬金産業袋

町家萬寶 商賣仕法大成 全部六冊 合卷三冊

此書ハ諸職ハ秘密奥儀ふ〳〵委くあ〳〵ハ図ハ図ハ図ハ図ハ外諸國乃産物ひらひすふ〳〵ハ備ハ商の重宝ふ〳〵しるし

手嶋堵菴先生述

女訓姿見 女前訓躾種 繪入 全一冊

此書は女子七才より教ゆべき事ども第一に成長して孝行貞操のたぐひ賢き婦人の例を挙げ守り学ぶべきを示す婚礼の式仏法神道男女盥沐と身を衣服と飾ぶる心得七外女戒宝玉事数を条々に先ず人倫の正路しるべき持敬積仁知命致知長者の人の著述せし

鎌田柳弘先生作

心學五則 全壹冊

六樹園大人譯 前篇六冊 後篇六冊

通俗排悶録

溪斎英泉画

浪速書肆 心斎橋通博労町南 河内屋茂兵衛藏版

此書は義島草木に易代何人とかいふべき辯まれば画と畫もの人雅史ものと霞ぶく画法をもつて重宝の画手本なり

東都葛飾戴斗画

花鳥画傳 初篇 二篇 全二冊

一勇齋國芳画

一勇画譜 全一冊

國芳多年の工夫を凝らし新奇妙案の景を画き太ふまつ画きたまひ普通の画譜の類とは雲泥の差ありて世ふ珍うるる画本なり

北齋爲一老人画

繪手本水滸画傳 全一冊

此画は画狂老人の筆にて水滸伝一百八人乃者像を丹精凝細筆出色画手本第一書なり

抑川前重信画

繪手本水滸画傳 全二冊

此画は抑川先生の筆にて水滸伝一百八人乃英雄を景ふ〻おのくを其人と隠て青紫の彩画を嫁る人の便なり

葛飾戴斗画

英雄圖會　全一冊

此書ハ本朝英雄良將名士の省像ニ古日佈大人細筆ニ画ヲ成シ給ふ小伝紙くくれで備君ヲ求ク上梓シ給ハベシ

一勇齋國芳画

三國英勇画傳　全一冊

あるハ呉魏蜀三國よりの名ある英雄ニ呉いろいろあり各小伝ヲ附シて章ニ記す射ぬ仕ル名ハ人一雪弗が筆力ニ拙ひれバ其ハ一部人ハ水滸画伝ハもとく考ら見るなめれぬ紙之

同

忠臣画銘々画傳　全一冊

此書ハ赤穂の義士四十七個忠臣の実伝ヲ奉て國芳大人省像画ヲ求れバ求くれ給たまく

溪斎英泉画

畫本錦之囊　全一冊

葛飾戴斗画

萬職圖考

初篇二篇三篇四篇五篇　全五冊

式絵師ハ金沢洞徳眼展物彫物内堂塔宮殿の彫物根付・指笄・紋・帯金具・飾沙陶器絵・沈金・蒔絵・あるいハ煙管・弦・死布糊・玉上・絵・際物形・職画その外絵師ハ人物・山水・人物・花鳥・虫獣・小物・彫巧の写生等絵・山水人物・花鳥・虫獣・小物・彫巧の写生ヲ以て万家大小ハ盗ある絵手本ハ

六樹園大人著

都乃手ぶり　全一冊

此書ハ江戸の繁盛ヲ記ス地の中も俳諧ハ古雨ヲ記しあるとれあり各紙ハ文ヲ記るがごくふうを記る名文ハ

徳齊原先生著

先哲像傳　全四冊

先哲名家ハ事蹟のミて省像の傳ヲ記ハ弁ヲ記ハ古人の省像ハ對ヲ時ハ其ヲ逢ハ古人ハ徳ヲ想像ヲ記ヲ此編ハ学者書家ヲ記め聞人雅技ハ記るまで由来正しく省像と真跡ヲ集め各小傳ヲ記ス

新著門集　全十冊

此書ハ古くより世ハ作ル家紙ハ一ハ孫ハ孫ヲ集ハ中人ハの性名居所年齢ヲ詳ハ記ハ古今未曾有ハ孫書ハ

山崎美成大人著

名家畧傳　全四冊

先哲叢談近世畸人傳ハ世ハ名ヲ記ハ雅ハの学士隠逸乃文人ハ記ハ言行ヲ集録せ書ハ

大阪書林　河内屋茂兵衛　梓

淡州樓馬大人評

開卷百笑　全二冊

世云い菊馬大人の集る処奇と物しるる人今青れ物と
ゆて老若男女えろう安心
中ふのなけゆうたまば長四紙
清しき夜の采帳と志のぐうと
けと上もちれ一書ん実ふ是を開き
えれを朝ふ笑を催かしめる
厳格の人とらくも絶倒せざる
ものなし一読して冠巻百笑を
登るれ虚あれを知り玉ひ

浪華書房

松亭金水著

大平樂皇國性質　全二冊

此書を儒者と俳者の説ぬ異
なるを論を説ぬとして古今
風俗の変化あるひを神社ふ
繋ぎ紙うけるふ誤ありとふ
現式ふ市ぞんど三味線琴ぬ
説豪富貧士を働る丈婦喧嘩
やなるもいはゆの咲云その外
挙てうぞくど何これとなり雑俗
ぬるふ説を出きる孫書なり

心斎橋通博労町角

河内屋茂兵衛藏板

日本百將傳一夕話　全十冊

松亭金水編述
柳川重信畫圖

扨も本朝開闢以来　神代のこと旦く舎て　神武の皇朝より今ふ暨び
彼西五百年ふ挑なくて三千年ふ向ともその中間ふ生きるものもく数年恒河沙ぞやかく
限りもなる人物ふちふむ威名海内ふ溢ぬ功ご蓋世ふ遺をものの元来挙て算ふべうもぞ
そ中ふも傑出さる名将の事實ぬ撰ぶ輯むる處一百員上古の　神武東征
の時ふ順ひ奉りて勲績ふ逆臣命ふ防まり元亀天正際ふ至りて千古獨歩の
豊公ふ畢ぬ。ものを俳作者ぬ杜撰ふ輯めるる所よりも仕青林羅ふ先醒ぬその
人物ぬ億兆の中ふ擇ぶ出さるて百將傳と題せるれ各ふ一代の勲績の概
畧を漢ぬ銘せるて書わるこの人のふく知ぬ所ふして万代不易の孫書なれば
今ぬ於て仰ぎ尊び魂ひい其文を風字ふ和らげ魂ひい称慢捕して童蒙の
観ぶるせど何ぞも小冊ふ人事ぬ及ばる我　皇國ふ勲績ある名将ぬ

浪華書賈　羣玉堂　河内屋茂兵衛梓

傳を撰りまく惟異聞珍説とも掲げ出て呉府の一夕話紙をそすゝめ彼浪華人の編輯
ものゝ高人一首の一夕話よりその趣を撰へて繕らもやとの腹藁なり幸ひ浪華の羣玉堂
余が志ふ周意して用枝せんと請ふまゝ速に筆を採りて短才固陋も顧ざ稿成
脱稿仕上て迂きふ発市もさんと欲も怖とまなる百拙作の前の拙ふ如く
神武帝心の御時より天正の際に至りて年数凡二千三百除　帝王一百八世紀年
上古中世近世と時代の易るのまゝ一百員ある良智の将その行人も一なるべ猶ふ
いの十人ふ十種の乱象ありるものゝ変化あり。されば此書を出右人ぬき
好ふ隨つて巻を開けばその時代の風俗及び一治一乱いつも更なり。その人それ
出自家系或ひは郷ゆ詩文の佳作且まさそれふ連さ人の物語さ人巨細の我人除も
ことのゆゝざれば諸書を集めて彼とまと心を労さんその人ゝの本傳と初ゝの俚捷なり。
是ふ繡像を加へゝふ親しく童蒙のまふ解て凌ぎんと思ふ為のゝ金水先人が
多年の丹誠今まて繕ゝ遊戯の書ゝ御ゝ聴なゝふゝゝなるまゝ